地域における非居住者による講を通じた活動の展開に関する研究

- 奈良県吉野郡天川村の天河大辨財天社を事例として -

DEVELOPMENT OF ACTIVITIES BY NONRESIDENTS THROUGH “KO”

- Case of Tenkawa Daibenzaiten-sha Shrine in Tenkawa-village, Yoshino-gun, Nara-prefecture -

森田 椋也^{*1}, 後藤 春彦^{*2}, 山崎 義人^{*3}

Ryoya MORITA, Haruhiko GOTO and Yoshito YAMAZAKI

An effective method to develop the activities of nonresidents in the area of the Tenkawa shrine is to offer extraordinary experiences in which people can participate casually through “ko” to enhance religious culture based on the shrine’s history. This can also increase the sustainability of the area where the shrine is located, as the charm of the shrine has attracted several households, which have moved into the village in recent years.

Keywords : Shinto Shrine, Social Capital, Sukeisha (Worshipper), Sukeikai (Veneration Association), Ko (Group of People Professing the Same Religion), Tenkawa Daibenzaiten-sha Shrine (or Tenkawa Shrine)

神社, 社会関係資本, 崇敬者, 崇敬会, 講, 天河大辨財天社 (天河神社)

1 序論

1-1 研究の背景

少子高齢化、人口減少の進むわが国においては、特定地域内に止まらない社会関係構築の重要性が高まっている¹⁾。特に人口減が著しい農山村においては、外部の主体も取り込みつつ地域の活力を動態的に維持していくことが持続的な地域像の一つとして考えられる²⁾。

ところで、全国各所に立地する文化資源の一つとして神社の存在が挙げられる³⁾。神社はその多くが祭祀を通じて地域住民の紐帯を育み保つことに長らく寄与してきた。神社とその祭祀を支える主体は地域内の「神職」「氏子」が中心であることは言を俟たない²⁾が、今後過疎化する地域³⁾においては、地域外にいながらも神社の護持に貢献する「崇敬者」とも積極的に関係を築き、地域の活力・活気を生むことにつなげていくことが望ましいと言えよう⁴⁾。

1-2 研究対象の選定と研究の目的

本研究では、かつての荒廃状態から復興され、参拝や在来の恒例行事参列にとどまらない崇敬者の新たな活動が「天河太々神楽講」(以下、単に「神楽講」とも記す)として20年来実施されてきた奈良県吉野郡天川村坪内の天河大辨財天社(以下、天河社)を対象に、社頭隆昌の経緯と、その要因と想定される神楽講の実態を捉える。それらをもとに崇敬者による活動を通じた人的資本・物的資本・社

会関係資本⁵⁾(以下、これら3つを総称し「諸資本」とも記す⁶⁾)の醸成過程を捉える。以上より、地域における非居住者による講を通じた活動の展開を明らかにすることを本研究の目的とする。

1-3 研究の方法

研究の流れを図1に示す⁷⁾。2章で対象地域、対象神社の概要を調査 i・iv をもとに記す。3章では対象神社の来歴を調査 ii・iv より整理する。4章では神楽講の概要を、5章では神楽講の活動(以下、「講活動」とも記す)の実態を調査 iii・iv より捉え、前章からの内容をもとに神楽講の特性をまとめる。6章では前章までの内容をふまえ、崇敬者による活動を通じた諸資本の醸成過程を整理し、それらの重層的様相を時系列に沿って把握する。以上をもとに7章で考察を行い、結びとする。

1-4 研究の位置づけ

本研究は、以下2つの研究の延長に位置づけられる。

(1) 神社に地域外からもたらされる諸資本に関する研究

根岸ら⁵⁾は、人口減少により人手不足・資金不足という問題を抱

Fig.1 Flow of research
図1 研究の流れ

^{*1} 早稲田大学理工学術院 助手・修士(建築学)

^{*2} 早稲田大学理工学術院 教授・工博

^{*3} 東洋大学国際学部国際地域学科 教授・博士(工学)

Research Assoc., Faculty of Science and Engineering, Waseda Univ., M.Arch.

Prof., Faculty of Science and Engineering, Waseda Univ., Dr.Eng.

Prof., Dept. of Regional Development Studies, Toyo Univ., Ph.D.

えつつも、地域外の主体を積極的に祭事運営に取り込み祭を成り立たせている埼玉県秩父市の事例を報告しており、そうした外部の主体が地域運営にも貢献することを明らかにしている。櫻井⁶⁾は、「外氏子」^{注8)}の伝統がある三重県名張市の積田神社を事例に、内氏子^{注9)}・外氏子の減少と「(外なる氏子)」^{注10)}の増加をふまえ、流動化した社会における氏神・氏子概念の変容を捉えている。

神社の崇敬組織に関しては、近代における神社附属の講的組織を概観した市田^{注11)}や藤本⁹⁾による研究があり、大正～昭和初期にかけて林立された講社や保存会、奉賛会といった組織が、神社への奉賛事業だけでなく、社会事業・教育事業等の活動も行なっていた歴史を示している。現代においては、上述の講的組織に由来するものや戦後復興を目的に新たに設立された崇敬会があることが知られている^{注12)}。全国の講社数は、講員300人程度までの小規模なものを中心に近年増加傾向にあり^{注13)}、資財が必要となる神社の造営や記念事業の実施、経営基盤の安定化を企図した講的集団の設立は今後も増加が予想される。こうした現代における神社の崇敬会、もしくは崇敬会に準ずる機能・形態を有する講や講社、講的集団^{注14)}に関する研究は管見の限りほぼ見受けられない。

(2)神社の境内地活用や体験的学習に関する研究

渡邊¹⁶⁾は、神社とその周囲の自然環境も含めた「鎮守の森」と地域づくりの関係を実証的に考察している^{注15)}。藤本¹⁴⁾は、氏子区域外の人々による主体的・日常的な神社の境内地活用(プレイセンター活動)の実例調査を通じ、従来の神社神道における社会福祉事業や教化活動¹⁵⁾とは異なる神社の新たな社会的貢献の可能性を提示している。神社の特性を活かした体験的学習(ワークショップ)については板井¹⁶⁾、¹⁷⁾による発表があり、開催神社の新たな崇敬者獲得や氏子・崇敬者間の接点創出につながる可能性について言及されているものの、実験的な開催の報告にとどまっている。

以上(1)・(2)をふまえ本研究は、崇敬会に準ずる機能・形態を有する天河太々神楽講の運営に着目し、特にその活動内容としての神社の境内地活用や体験的学習の実践を捉え、非居住者による講を通した活動展開の可能性を考究する点に特徴を有する。

2 研究対象の概要

2-1 対象地の概要

天川村は奈良県の中央部に位置する山村である(図2)。洞川地区、中央地区、西部地区の3地区よりなる。昔から山上ヶ岳や弥山へ登拝に訪れる人々が多く、特に洞川地区は旅館や民宿等で賑わっている。そうした背景もあり近年は観光産業に注力しており^{注17)}、天河社の位置する中央地区坪内集落でも民宿やペンションが増えている^{注18)}。坪内の世帯数・人口の変遷を図3に示す。村の人口は減少が進んでいるが、坪内には近年5世帯のIターンがみられ、「そのすべては神社に魅かれて定住を決意した」とのことである^{注20)}。

平成23年9月に発生した紀伊半島大水害時、坪内は川の水位上昇に伴い家屋の大半に全半壊等の浸水被害が発生、1名が犠牲になった。

2-2 対象神社の概要

Fig. 2 Map of Tenkawa Village

図2 天川村地図^{注16)}

天河社の社殿造営は7世紀で、戦勝祈願の功に対する感謝の印としての天武天皇によるものが最初と伝えられる。主祭神は辨財天としても信仰される市杵島姫命であり^{注21)}、芸術・芸能の神として村外から参拝に訪れる者も多い。能楽に関連する文化財を多く所蔵する。大峰信仰七十五願の1つである弥山を奥宮とする。修験道の影響が色濃くうかがわれる祭事も実施されている。

かつては天川村全体が氏子区域だったが、現代は坪内のみを氏子区域とする。外部からの移住者は氏子の扱いはされないが、中には神社の行事の手伝いに必ず参加する者もいる。大祭前の「総人足」(集落内の草刈りや幟旗の設置等の共同実施)参加者数は近年50人程で、高齢化の影響で存続が厳しくなりつつある^{注22)}、^{注23)}。

2-3 研究対象の位置づけ

本研究で対象とする天河社は、講をはじめとする崇敬者の活動を通じて神社が再生されていった点で全国的にみても稀有な事例である。本事例でその経緯や要因を把握することは、今後人口減少が進むわが国において、ほとんどの集落にも存在する神社を中心的に活用し集落の再生を図っていくにあたり有意義である。

3 神社復興から調査時現在までの天河社の来歴(図4)

3-1 phase 1: 第二次世界対戦後～神社再興、芸能奉納の再開(昭和23～54)

明治の神仏廃止令や修験道廃止令の影響を受け、天河社は長らく廃絶されていたものの、昭和23年に社家の有志により復興され、以来能楽や狂言の奉納が実施されるようになる。その後所蔵する宝物の調査が開始され、昭和41年には能面・能衣装が奈良県の文化財に指定された。同年、現職宮司(第65代)が専門の神職として就任し、それ以後は神社境内地が常に清浄に保たれるようになる^{注24)}。昭和45年の例大祭において観世流京都の名士による奉納が行われたことを皮切りに、諸流派の名士らが芸能を奉納することが恒例となった。

3-2 phase 2: 南北朝和解の塔建立～社殿建替「平成の大造営」(昭和55～平成4)

天川村は南北朝時代、後醍醐天皇以降4代に渡り南朝の拠点とされていた^{注25)}。この歴史をふまえ、南北朝和解の宝篋印塔が建立される。それ以来、南朝方の子孫や関係者が頻繁に天河社を訪れるようになる^{注26)}。さらに翌年の昭和56年には60年に一度実施される御秘

Fig. 3 Change in number of households and population in Tsubouchi

図3 坪内の世帯数・人口の変遷^{注19)}

Fig.4 History of Tenkawa Shrine and restoration of “Tatakagurako” (after World War II ~ the time of the survey)

図4 天河社と復興された「太々神楽講」の来歴（第二次世界大戦後～調査時現在）

神「日輪大辨財天」の開帳を迎え、崇敬者の参拝が盛んになり始める^{注27)}。そうした流れを転機として、昭和55～57年に奥宮、昭和62～平成元年には里宮と、老朽化が進んでいた社殿の全面改築が実施される。また昭和63年には宮司を理事長とし、崇敬者の音楽家や漫画家らを評議員とする財団法人「天河文化財団」が設立され、音楽会や講演会等の活動を開始する。

先の社殿改築のために融資を受けていた天河社であったが、返済資金が想定より集まらなかったため「返済が不可能になり、神社所有の境内の土地や山林が競売にかけられる」^{注28)}との報道が平成4年、各社の新聞に掲載される^{注29)}。この報道を受け、崇敬者らを中心とした「天河大辨財天社支援活動」である「天河曼陀羅」が開始された^{注30)}。具体的には、東京や京都でのシンポジウム、講座等の催事開催を通じて、天河社の村外での認知度を高めるとともに、財政面からの支援呼びかけが行われた。また、催事参加費から得られた収益は神社に寄付された。こうした動きはその年のうちに崇敬会の設立へとつながったが、「理念、会則、方針、運営をめぐり十分に固まるまでには至らなかった」^{注31)}。

3-3 phase 3：神社負債報道～「太々神楽講」復興（平成5～8）

かつて天河社の護持講として存在した「太々神楽講」を復興しようという気運が崇敬者の間で平成2年より高まっていた。上記の崇敬会設立と護持講復興呼び掛けの2つの流れが合わさって、「太々神楽講」が平成5年に復興される^{注32)}。その3年後の平成8年7月の例大祭終了後、崇敬者らが宮司宅に集まり、今後神楽講を活性化していくための方策が話し合われた結果、講の機関紙を出すことと、活動を通じて広がり輪を作っていく^{注33)}ことが決定される。

以降、崇敬者によるセミナーやワークショップ等の講活動が展開され、講活動報告・開催告知等も含んだ「天河太々神楽 講社通信」（以下、「講社通信」）が年1回程度発行されるようになった。こうして神社を村外から持続的に支援する体制が整えられ、神社の財政面の状況は徐々に改善されてきた。

3-4 phase 4：「太々神楽講」講活動実施～（平成9～）

平成8年内の講活動はそれ以前にも奉納演奏やワークショップを実施していた講元2名によるもののみであったが、平成9年より新たな複数の講元による講活動が展開されていった。平成16年には天河社奥宮弥山を含む「大峯奥駈道」が世界遺産に登録される。平成20年には「平成の大造営」から20年の記念として、7月の例大祭を「御遷宮二十年記念大祭」と称し、御秘神「日輪大辨財天」が特別に開帳される。また同年に、風雨雪により損傷が進んでいた奥宮の修復工事も実施された。翌年の平成21年、天河社の禊殿前に穴窯「天河火間」が造営された。この窯は平成23年の紀伊半島水害時浸水被害を受けたが、翌年には再興されている。平成25年、天河社所蔵の能面が国の重要文化財指定を受けた。

4 天河太々神楽講の実態

4-1 神楽講の概要

天河太々神楽講は、調査時現在より約390年前に創設された護持講であり、神前における舞楽奉納を通じて神徳を讃え祈ったとされる「太々神楽」に起源を持つ^{注34)}。長らく不活性であったが、先述の通り平成5年に復興され、天河社直轄の講社となっている。講の規約では「氏子崇敬者によって構成する」とされているが、講員は実質村外の崇敬者である^{注22)}。講員は講金を1年毎（直講員は1ヶ月毎）に納める。講員の特典として、境内地を使用した研修会や講習会、芸能奉納等の実施^{注35)}や、おんだ祭での早乙女奉仕ができること等がある。「ゆるぎなく固い組織づくりをめざすのではなく、自立した個人が、それぞれの意志で、それぞれのやり方で参加し、互いに異なる魂の輝きを尊重し合い、磨き合って、生命の本源に触れてゆく、やわらかく、開かれたネットワークである」^{注36)}とされる。

「太々神楽講ボランティアスタッフ」（以下、「ボランティアスタッフ」と記す）は、崇敬者として神楽講創設に関わり、創設後は神社運営・講活動開催支援を行ってきた。天河社の関与者の相関図を図5に

示す。

4-2 神楽講の新入講者の変遷

神楽講の新入講者数とその分布の変遷を図6に示す。新入講者数自体は減少傾向にある。全期間を通して大阪府と東京都在住者が多くみられるが、新入講者は各地に分布していることがわかる^{注38)}。

4-3 神楽講の活動の概要

講活動は、「全ての人々が本当に霊的に元気回復できる」ことをめざし、「太古からの祈りの場」としての当該地域の特性を活かした講習会やワークショップ等の形で実施されてきた^{注39)}。個々の催事は講員の中から「講元」が主催をつとめる。講活動によっては「世話人」や「先達」が配され、参加者（講員か否かは不問）を募り実施される。講元は、「人と人をつなぎ、人と神（生命の本源）とをつないでゆく、つなぎ役に徹する」^{注36)}ものとされる。講活動実施にあたり、参加者は天河社への正式参拝を行うことが慣例となっている^{注40)}。活動の具体的内容については次章で扱う。

4-4 講活動参加者の参加の動機

講活動参加者の参加動機について、講社通信における言及箇所を抽出し分類を行なった結果を表1にまとめた^{注41)}。「会のテーマに関心を持った／持っていたため」「講元に勧められたため」という主旨の動機が最も多くみられる。その他、宮司や親族、友人、ボランティアスタッフ等からの開催案内を受けての参加が多い。弥山登拝を含む講活動への参加を通して「自分試し」をしたかったという記述もみられた。

Fig. 5 Correlation diagram of concerned parties in Tenkawa Shrine
図5 天河社の関与者の相関図

Table1 Classification and number of motivations for participation in Ko activities	
表1 講活動参加動機の種類とその件数	
会のテーマに関心を持った／持っていたため interested in the theme of the activity	17
講元に勧められたため encouraged to participate by ko-moto	16
宮司に勧められたため encouraged to participate by the chief priest	4
知人に勧められたため encouraged to participate by acquaintances	4
天河を一度訪れてみたいと思っていたため wanted to visit Tenkawa once	4
ボランティアスタッフに勧められたため encouraged to participate by the volunteer staff	2
自分試しのため wanted to try	2
講元が尊敬する人物であったため he/she respects the ko-moto	1

4-5 講員が講元を務めた動機

講員が講活動の講元を務めた動機について、講社通信における言及箇所を抽出し分類を行なった結果を表2にまとめた^{注41)}。他の講元や宮司、ボランティアスタッフからの勧めを受けて講元を務める場合が多いことがわかる。

Table2 Classification and number of motivations for hosting Ko activities
表2 講元を務めた動機の種類とその件数

他の講元に勧められたため encouraged to host by other ko-moto	3
講活動として行ないたいテーマがあったため had an idea for a Ko activity theme	2
宮司に勧められたため encouraged to host by the chief priest	1
ボランティアスタッフに勧められたため encouraged to host by the volunteer staff	1
家族が天河と縁があったため family related to Tenkawa	1

5 神楽講の活動実態

本章では、講社通信に各年間の報告がある平成8年から平成26年まで^{注42)}の講活動の変遷を、祭典行事との関係もふまえて概観する。

5-1 講活動実施件数

講活動の実施数を図7にまとめた。講活動開始から平成13年ごろにかけては、初年の平成8年を除き1年あたり20件前後で、最も盛んに実施された。平成14年から22年ごろにかけては1年あたり15件前後、平成23年以降は1年あたり10件未満で推移している。以上をもとに、平成9年～13年をphase 4(a)、平成14年～22年をphase 4(b)、平成23年～26年をphase 4(c)とし、以降の分析に用いる。

5-2 講元の変遷

講元の変遷を図8に示す。phase 3での講元は2名だったが、phase 4(a)のうちに多くの新たな講元による講活動が実施された。phase 4(b)以降はphase 4(a)から講活動を継続して行う講元が複数みられ、phase 4(c)での新しい講元は少ない。講社本部主催の講活動はphase 4(b)に多く行われていた。

複数講元の共同による講活動実施が全期間を通じてみられるが、特にボランティアスタッフを含んだ共同実施がphase 4(b)に多く行われている。

5-3 講活動の内容

講社通信での実施報告をもとに各講活動の内容を抽出し分類を行なった結果を図9に示す。特に村内宿泊を伴う講活動は、複数内容の組み合わせで構成される場合が多い。通算で最多の類型は「祭典行事参加」であった。それ以外では「気功・ヨガ・瞑想」、音楽や舞踊のワークショップ、「講演」等が多くみられた。大半の活動類

Fig. 6 Transition of new members of ko and their distribution
図6 新入講者数とその分布の変遷^{注37)}

(一部は他の講元との共同実施であるが) phase 4(a) から「祭典行事参加」を含んだ講活動を継続的に実施してきた。節分祭では講元 T. K. が phase 4(a) から祭典行事内での作陶、七夕祭では講元 A. T. が phase 4(b) から行事運営手伝いを中心とした講活動を継続的に実施してきた。

5-5 講活動実施場所 (図 11)

神社の境外^{注 44)}での講活動の具体的な場所・活動内容は、参集殿での各種活動を中心として、本殿での神前奉納、来迎院 (かつての天河社の神宮寺) 横の大銀杏の木の下や南朝黒木御所跡での気功、禊場 (河原) での清掃や神業・瞑想、付近の森林や畑の散策、天河火間付近での作陶、弥山や八ヶヶ岳等の山々への登拝と頂上でのワークショップ、奈良県内の他所神社巡拝といったものが確認された^{注 45)}。

Fig.11 Locations of Ko activities around Tenkawa Shrine
図 11 天河社周辺の講活動実施場所^{注 16)}

5-6 村民との交流・協働がみられた講活動

講活動参加者と村民との交流・協働に関する記述を講社通信より抽出した結果、phase 4(a) 期最終年以降、毎年継続して 1 件以上の交流・協働が確認された (図 7)。これは主に phase 4(b) 以降の講元 A. T. (調査 iv 聞き取り対象者) の講活動による (図 8 より)。具体的な交流・協働の内容としては、参加者が年配の村民から話を拝聴する、祭事の準備・片付けを氏子と協力して行う^{注 46)} (A. T. の講活動がこれに該当)、村民 (子供含む) が参加者として講活動に加わる、地元商店主をゲストに迎えて新産業 (アロマ精油抽出) 創出を試みる、

参加者が在地の講 (弁天講) に加わる、といったものがみられた。

5-7 神楽講の特性の整理

講活動が実施されてきた phase 3 から phase 4(c) は、それぞれ以下のように総括できる。phase 3: 始動期、phase 4(a): 試行期 (多くの新たな講元により多様な講活動が実施、様々な祭典行事との同時開催も試みられた)、phase 4(b): 興隆期 (講元の数・活動の種類が phase 4(a) と比して一定程度絞られており、天河社独自の五十鈴文化の敷衍・研鑽のための講習会も継続的に実施された。講活動参加者と村民との交流・協働が継続して確認され始めた。後半以降、神社境外での活動を含む講活動が高頻度で実施されている)、phase 4(c): 定常期 (新しい講元の参入は少ない。平成 23 年の水害が幾許か作用したものと推察される)。

また前章からの内容をもとに、「崇敬者・信者の講」^{注 47)}、現代における一般的な「崇敬会」^{注 12)}と、天河太々神楽講を比較対照した結果を表 3 にまとめた。主だった特徴を以下に記す。

講員の分布・地域社会との関係: 「信仰中心にむすばれる、比較的ひろい範囲にわたる信者・崇敬者の組織である」^{注 47)} という点で、神楽講は他 2 つと共通している。主として地域外の崇敬者により構成されるが、氏子や地元住民との交流・協働が見られる。

設置の契機・結集の原理: 崇敬者らの発意に基づき、かつての音楽講を復興する形で設置された。地縁や明確な同信性に基づかず結集される。

設置目的: 神社の維持・教化活動の実践といった目的を有する点で他 2 つとの共通の性質を有しつつ、「人々に『霊的元気回復』をもたらす『時』と『場』」の提供をめざしている点で特徴的である。

管理体制: 講員を管理し、参詣時の祈願・宿泊に便宜をはかる、護符の頒布を行うといった点で、「信者・崇敬者の講」と共通する一方で、講元間の連携が見られるなど、信仰中心との垂直的な関係だけでなく、崇敬者間の水平的な関係も形成されている。

6 崇敬者による活動を通じた諸資本の醸成過程 (図 12)

6-1 phase 1 (昭和 23 ~ 54)

祭典行事での能楽の奉納が継続的に行われるようになる。

6-2 phase 2 (昭和 55 ~ 平成 4)

能楽以外の芸能についても祭典行事での奉納が次第に行われるようになる。財団法人「天河文化財団」が設置され、天河社が文化的活動を展開してゆくための基盤が形成される^{注 48)}。

6-3 phase 3 (平成 5 ~ 8)

崇敬者らの地域外活動を経て天河太々神楽講が設置、講活動の実施と講社通信 (崇敬者間の情報共有媒体) の発行が開始される。後にボランティアスタッフとなる M. Y. が天河社を訪れ、講活動の下支え、講社通信発行の補助等を行うようになってゆく。おんだ祭・抜穂祭において、地元の作長・植手らの指導の下、崇敬者らが早乙女奉仕を行うようになる。

6-4 phase 4 (平成 9 ~ 26)

phase 4(b): 興隆期には、氏子・崇敬者間の社会関係の深化への寄与が考えられる^{注 49)} 講元 A. T. の講活動「七夕祭お手伝いワーク」や、五十鈴文化の敷衍・研鑽のための講活動「天の安河文化を学ぶついで」が実施され、講元 T. K. や先達 T. K. らが中心となり続けられてきた講活動「天河護摩壇野焼き講」の延長で^{注 50)}「天河火間」の造営が行

Table3 Arrangement of Tenkawa Tatakagurako by comparison between “ko of worshippers and believers” and “sukeikai (veneration association)”
表3 「崇敬者・信者の講」「崇敬会」との比較対照による天河太々神楽講の特性の整理

	「崇敬者・信者の講」(文献23) “ko of worshippers and believers”	現代における神社の崇敬会 veneration association of shinto shrine in modern times 天河太々神楽講 Tenkawa Tatakagurako	「崇敬会」(文献10) “sukeikai (veneration association)”
	「信仰中心にむすばれる、比較的ひろい範囲にわたる信者・崇敬者の組織である」(文献23) “It is tied to the center of faith, and is an organization of worshippers / believers over a relatively wide range”		
議員の分布・ 地域社会との関係 Distribution of ko members / Relationship with community	「ほとんど講は、家単位に結成され、集落の結合関係と、緊密に関連している。村落の講は大体いゆる部落単位、あるいはその内部の村組(小地域団体)、または同族団を基礎としてむすばれ、全員の参加を原則とするものが多い」 「新しい崇敬者・信者の講には」「有志加入の形が多い」 “Most kos are organized homes and are closely related to the association relationship of the villages. The kos of villages are roughly organized in Buraku units, or village groups (small regional groups), or clan-based groups. Most of them take it as a rule that all members should participate” “New kos of worshippers and believers” mostly take forms of voluntary participation”	「氏子区域外の崇敬者により構成される」 議員は特定の地域に基づかず、個人単位で全国に分布 崇敬者だけでなく、氏子や地元住民も参加する講活動もある The members are not based on specific areas, and are distributed nationwide Parishioners and local residents also participate with worshippers in some ko activities	「伝統的な氏子区域の地域的住民の組織(町内会)を基盤として、名目的には独立しつつも実質的にはこれと表裏一体の運営がされているような組織もあり、他方、旧来の町内会や氏子組織とは明確に独立して、構成員の範囲も氏子区域外も含めた広範囲で大きな組織のものまである」 “Some organizations are nominally independent, but cooperated practically with the organization of regional residents in the traditional neighborhood association. Others are clearly independent from the traditional neighborhood association and parishioners’ organizations and have members in a wide range including outside the area of parishioners”
設置の契機・ 結集の原理 Timing of installation / Principle of mobilization	「本源的には議員(崇敬者・信者)の、自発的な要望に発するというよりは、むしろ外部からの働きかけによるところが大きかった」 「同一の信仰にむすばれる」 “Originally, rather than being derived from voluntary requests of members (worshippers and believers), it was due to external actions” “They are tied by the same faith”	神社の社殿建替に伴う負債問題をきっかけに、崇敬者らにより呼びかけ、かつての音楽講を復興 地縁や明確な同信性に基づかない結集 The problem of debt accompanying the rebuilding of the shrine, revived ko calling by worshippers The mobilization is not based on community or the same clear faith	「戦後の神道指令と神社の宗教法人化に伴い、従来の町内会組織から分離する形で発足したものが多く、ことにもともと氏子をもたない神社においては組織化が早かった。また、近世に発達し、あるいは明治期の大教宣布の直後に設立された「講」や「講社」の組織が崇敬会に発展したものもみられる」 “Following the Shinto directive after the war and becoming the religious corporation of the shrine, most of them were established separately from the traditional neighborhood association organization, and in particular the shrines not having parishioners originally organized them quickly. In addition, some organizations such as “ko” or “koshu” having evolved in the Early modern times or established after the Meiji era developed into them”
設置目的 Installation Purpose	「一面これらの社寺・教団の維持のための組織にはならない」(文献23) / 「神社の維持、造営や教化活動の実践のため」(文献10) “It is nothing but an organization for the maintenance of these shrines and cults” / “for the maintenance, construction and educational activities of the shrine”	「神社の恒例の祭行事などを中心に神社の経常費を負担あるいは助成したり、教化活動を目標とする」(文献10) “Burden or subsidize the ordinary expenses of the shrine, mainly for annual festivals, and aim for educational activities”	「臨時に設置される組織は、神社の造営や記念事業、式年の大祭などにあたり、とくに多額の募財などが必要な場合に設置され、目的を達成すると解散されるものである」 “Temporarily established organizations are set up in the case of shrine construction or commemorative projects, annual festivals and so on, especially when a large amount of funds is required, and will be dissolved when the objective is achieved”
管理体制 Management system	「いわゆる社家・宿坊が、いくつかの講を所屬させ、議員の参詣にたいしては祈願と宿泊の便宜をはかり、あるいは護符神札の類を頒布するのが通例である」(文献23) “It is usual for a family of priests or the lodging to manage several kos, to take advantage of the worship and accommodation for members, and to distribute talismans”	議員が独自に講活動ごとの事務局を構えている場合もある 複数の講元が講活動を実施、議員間の連絡がある 神社職員やボランティアスタッフが「つなぎ役」として議員間土の関係を築く Sometimes the ko-moto has his or her own secretariat for each activity Several ko-motos host Ko activities and there is contacts between ko-motos Shrine staff and volunteer staff build relationships among members as a “connection role”	(文献10に記載はないが、神社管理者による会員管理が一般的であると想定される) Although not described in reference 10, member management by the shrine administrator is assumed to be general
運営方法・資金 Operation method / funds	「単に参詣者を待ちわかえるにとどまらず、進んで社家・宿坊が、各地の講を歴訪して護符を配り、祈願に当り、あるいは寄財をもとめることもおこなわれる」 「講金」などと称して、一定額を醸出し合い、社寺への納金と参詣旅費に充て、護符などの頒布をうける」 “Not only waiting for worshippers, the family of priests and the lodging also visit kos in various places, distribute talismans, pray for them, or collect contributions” “Members of ko share some money called “fee of ko”, using it for the shrine and travel expenses and receive talismans and so on”	議員は講費を毎年(議員種別によっては毎月)納める 護符・祭典行事案内が郵送される 講活動は都度参加費制 神社職員やボランティアスタッフ、講元らが、参拝者や知人に対して講活動参加・入講、講活動参加者に対して入講・講元を勧める Members pay the fee every year (every month depending on the type of member) Talismans and festival information are mailed Participants in ko activities pay fee for each activity Shrine staff, volunteer staff and ko-motos encourage worshippers and acquaintances to attend ko activities and join ko, and host activities	(文献10に記載はないが、常設的な崇敬会については、会員は会費を定期的に納めるものが一般的であると想定される) Although not described in reference 10, regarding a permanent veneration association, a regular fee paid by members is assumed
議員の活動形態 Activity of ko members	「議員が順次輪番に代表として参詣」する「代参制」 「単なる信仰上の機能だけにとどまらず、講仲間親睦・娯楽(旅行・共済などの組織として働くものも多くみられる」 「まったくの参詣旅行組合にすぎぬものも多くみられる」 「山岳信仰の講」では、「一般に指導者に、“先達”などと呼ぶ修練の積んだ信者を立て、その先導によって、年々多くの議員が登山をする形がとられた」 “representative system” means that “Members go to worship as representatives in turns” “Many kos work not only in faith functions, but also as organizations of members such as friendship, entertainment (travel), mutual aid and so on” “Many kos are nothing but travel associations” In “ko based on mountain beliefs”, “Trained believers called “Sendatsu” guide many members climb the mountain every year”	講社大祭が毎年斎行される 参詣に加えて、セミナーやワークショップ(議員以外も参加可能)を講元(議員の中から希望者が務める)が実施、“先達”を配した講活動もある 複数の講元の共同による講活動実施も見られる Grand festivals of kosha is sailed every year In addition to worshipping, seminars and workshops (everyone can participate in) are held by ko-motos (a wisher from members), and some activities have “sendatsu” As a rule, ko activities involve formal worship to the shrine Multiple ko-motos perform ko activities	(文献10に記載はないが、講社から発展した常設的な崇敬会の中には、講社大祭、会員が集まり参詣旅行等を行うものも見られる) Although not described in reference 10, regarding a permanent veneration association developed from kosha, some koshas have grand festivals and travels for worship

Fig. 12 Fostering capital through activities by worshippers
図 12 崇敬者による活動を通じた諸資本の醸成過程

われている。「天河火間」は村民らの作品を焼くのに用いられ、地域文化活性に貢献する施設として運用されている。
天河文化財団は海外の講師招聘や「天河火間」造営への協力等を

通じ、崇敬者による活動を下支えしている。
ボランティアスタッフ M. Y. は、平成 24 年には坪内集落に移り住み、講活動以外にも天河社の運営に協力するようになった。

平成 23 年の大水害で、天河社は社務所・参集殿等が浸水損壊の被害を受けたが、神楽講諸元らのネットワークを駆使した神社への支援呼びかけが行われ、復旧費用が賄われた^{注 51)}。復旧作業を手伝うボランティアとして村を訪れる崇敬者や、面識のある村民に支援金を手渡して回った講元もいた^{注 52)}。このように非常時にも有用に機能する社会関係資本が、神社を介して築かれていることがうかがわれた。

7 結論：地域における非居住者による講を通した活動の展開

神楽講設置の直接的な契機は、社殿建替に伴う神社負債報道であった。しかしそれ以前の神社の取り組みによって、崇敬者の増加や祭典行事の充実、神社の文化的活動展開の基盤となる財団法人の設立等が実現し、それらが複合的な要因として講の設置や活動の展開に寄与したことがうかがわれる。上述の取り組みとして具体的には、地域外の芸能者の協力を得て祭典行事斎行の伝統を再生・充実すること、聖域としての神社境内を常に清浄に保つこと、所蔵する宝物や歴史的資源の活用を時節をふまえて行うこと、といったものが確認された。

神楽講は、講結集の原理として従来指摘されてきた「地縁」や明確な「同信性」に基づいておらず、気軽に参加できる非日常的な体験（気功やヨガ、散策、作陶等）を神社周辺において提供する講^{注 53)}として実践されてきた点で特徴的である。こうした特性を帯びた講の運営は、始動期、試行期を経て興隆期以降にみられる活動の充実につながり、祭典行事手伝いとしての人的資本や地域文化活性に貢献する物的資本、災害時には外部支援を地域にもたらす社会関係資本といった諸資本に結実してきたと言える。

以上より、地域における非居住者による活動を積極的に展開させるためには、当該神社の由緒をふまえた宗教文化の充実を図りつつ、気軽に参加できる非日常的な体験を「講」を通して提供することが有用な手法の 1 つたり得ると考えられる。このことは、神社の魅力を理由に村外から移住してきた世帯が近年複数見られることからうかがわれるように、当該神社が立地する集落の持続性を高める可能性も認められる。

本研究の対象地域において非居住者による講を通した活動が展開し得た背景に、気功や瞑想等の活動に適した豊かな自然環境や、能楽と関連した歴史的・文化的資源を有していたことが大きく関係すると考えられるが、本研究で得られた知見をもとに他地域での試行と更なる検証が期待される。

謝辞

本稿執筆にあたり、調査にご協力頂いた天河大辨財天社宮司、禰宜、並びに天河太々神楽講の皆様深く御礼申し上げます。

We would like to thank Editage (www.editage.jp) for English language editing.

注

注 1) 全国に立地する神社の数は、神社本庁包括下の宗教法人として登録されているもののみで 78,802 社である(平成 28 年末日時点/神社本庁編『月刊若木』第 822 号参照)。

注 2) 「神職とともに神社の法人としての運営に携わる責任役員数が二万八〇六九人、総代数が三六万五六七七人(平成二二〔二〇一〇〕年末現在)であり」、「二万人弱の神職の力だけでは神社活動を支えていくことが無理なことは確かであり、神社をささえる人的社会資源、つまり全国

各地域の神社の総代や氏子組織の尽力の大きさを窺い知ることができる。」(文献 3 の 47 ～ 48 頁より引用)

注 3) 石井(文献 4) は、平成 25 年に日本創成会議が公表した「消滅可能性自治体」に位置する宗教法人としての神社数は、全国総数の約 4 割に相当することを示している。

注 4) 文献 10 の 355 頁では、「氏子」について「一般に一つの神社を崇敬し、信奉する鎮座地周辺の地縁的集団あるいはその構成員のこと。(中略)別に崇敬者という用語もあるが、この場合、氏子はその神社の氏子区域の者で崇敬者はその区域以外の者という地理的区分によって分けるのが普通である。」とある。これに則り本研究では、氏子は「氏子区域に居住し当該神社を崇敬する者」、崇敬者は「氏子区域外に居住し当該神社を崇敬する者」を示す語とする。

注 5) 文献 1 で稲葉が指摘するように、「社会関係資本の定義はさまざまだが、(中略)基本的な構成要素としては「社会における信頼・規範・ネットワーク」を含んで」いる。本研究での社会関係資本も「社会における信頼・規範・ネットワーク」をさす語として用いるものとする。

注 6) 資本の 3 分類は社会関係資本論者である Coleman に倣っている (James S.Coleman: Social Capital in the Creation of Human Capital, The American Journal of Sociology, vol. 94(Supplement), pp. S95-S120, 1988)。

注 7) 調査概要を補表 1 に示す。なお、調査 ii・iii の調査対象である太々神楽講神社本部発行の「天河太々神楽講社通信」は、神事・講活動の実施報告や、講活動参加者による体験談、ほか崇敬者らによる随筆を中心に構成されている。

注 8) 「外氏子」は「かつては居住していたが現在は氏子区域に住んでおらず、親元に帰る際に神社の祭礼に参加するか、あるいは祭礼や建替の際に奉賛金を納めるのみの」(文献 3 の 49 頁より引用) 者のことで、関沢(文献 7) による詳細な調査がある。「出氏子」とも呼ばれ、同様の事例は和歌山県橋本市・伊都郡などにもみられる(神社新報 平成 30 年 5 月 14 日第 3399 号 5 頁「過疎化が進む地域の祭礼 - 和歌山県神社庁橋本伊都支部の氏子たち」より)。

注 9) 「氏子区域に現在も住み、神社への人的協力や奉賛を行う」(文献 3 の 49 頁より引用) 者のこと。一般に想定される氏子がこれに該当しよう。

注 10) 「造営工事の関係者、氏子圏内への進出商店やムラ人とのつながりが発生していた外部者など」の「篤志寄付者」がこれに当たる(「内は文献 6 の 130 頁より引用)。

注 11) 文献 8 の 353 ～ 391 頁、市田雅崇著「近代神社の講的組織」。

注 12) 文献 10 の 357 頁「崇敬会」の項を参照。

注 13) 神社本庁の機関誌「月刊若木」に毎年掲載される「神社活動に関する全国統計」内、「講組織の状況」並びに「参詣・祈祷・授与・講社の状況」参照。

注 14) 講や講的集団に関する研究自体は、経済的な講から宗教的な講まで多様な実態を捉えた研究蓄積がある。昭和 35 年前後まで盛んに行われた講研究の集大成として桜井徳太郎「講集団成立過程の研究」(吉川弘文館、昭和 37 年) が挙げられる。長谷部(文献 11) が指摘するように、村落社会の変貌に伴いかつて社会的・文化的集団の中核を担っていた講の数は減少傾向にあるものの、現代にも講的集団は多く存在することから、「講研究会」が平成 23 年に設立され、講的集団の「集団結合の原理」の考究が進められてお

Additional table1 Survey overview
補表 1 調査概要

Survey i : Documentary search (Chapter 2) 調査 i : 文献調査 (2 章)		
調査対象 : 文献 18、天河社の紹介冊子「古来より続く聖地 魂の故郷 天河」、天河社 HP (http://www.tenkawa-jinja.or.jp/ (2018.07.01 確認))、広報てんかわ 臨時号 (2011.09.04) Objects: Reference 18, the booklet that introduces Tenkawa Shrine "Tenkawa, hometown of spirit that continues from the ancient times", Tenkawa Shrine's HP, Public information magazine Tenkawa -Extraordinary issue		
調査内容 : 天川村の概況、天河社の概要 Content: Site description		
Survey ii : Documentary search (Chapter 3) 調査 ii : 文献調査 (3 章)		
調査対象 : 太々神楽講神社本部発行「天河太々神楽 講社通信」第 1 号 (1996.9) ～ 第 14 号 (2016.1)、天河社の紹介冊子「古来より続く聖地 魂の故郷 天河」、神楽講入講案内書、文献 19 ～ 22 (その他、各社新聞記事により不足情報を補足) Objects: "Bulletin of Tenkawa Tatsakagurako" (Headquarter of Tenkawa Tatsakagurako publishes) no. 1 (Sep. 1996) ～ no. 14 (Jan. 2016), the booklet that introduces Tenkawa Shrine "Tenkawa, hometown of spirit that continues from ancient times", Invitation to members of Kagurako, Reference 19 ～ 22 (In addition, brief information is supplemented by articles of each newspaper company)		
調査内容 : 天河社の来歴 Content: Tenkawa Shrine's history		
Survey iii : Documentary search (Chapter 4, 5) 調査 iii : 文献調査 (4-5 章)		
調査対象 : 太々神楽講神社本部発行「天河太々神楽 講社通信」第 1 号 (1996.9) ～ 第 14 号 (2016.1)、天河社の「Bulletin of Tenkawa Tatsakagurako」(Headquarter of Tenkawa Tatsakagurako publishes) no. 1 (Sep. 1996) ～ no. 14 (Jan. 2016)		
調査内容 : 講活動参加・入講の動機、祭典行事・講活動の変遷、氏子・崇敬者間の交流・協働 Contents: Motivation for participation in Ko activities and joining ko, Transition of festivals and activities of ko, Exchange and collaboration between parishioners and worshippers		
Survey iv : Interview (Chapter 2 ～ 6) 調査 iv : 聞き取り調査 (2 ～ 6 章)		
調査対象 Objects	ID	調査日時 Survey date
天河社 禰宜 Tenkawa Shrine's Negi	M.K.	2017.07.15
太々神楽講ボランティアスタッフ voluntarr staff of Tatsakagurako	M.Y.	2017.08.20、 2017.05.14
「天の川に祈る 天河セタ祭 お手伝いワーク」講元 ko-moto of "Praying for Tennokawa River :Tenkawa Tanabata Festival Assistance Work"	A.T.	2017.07.15
設問内容 : 調査 i・ii・iii の補足 Content: Supplement of survey i, ii and iii		

り、文献 8、11、12 などの成果が公表されている。関連して、藤本は「現代は「講」組織をめぐる新たな活動の展開が各地の社寺で模索されている時期である」と述べている。(文献 9 の 122 頁より引用)

注 15) その他、交流やセラピーの場、自然エネルギー拠点等としての神社の活用については、「鎮守の森コミュニティ研究所」(<http://c-chinju.org/> (2018.6.30 確認)) の調査・研究活動がみられる。

注 16) 国土地理院基盤地図情報をもとに筆者作成。

注 17) 「天川村創生総合戦略」(平成 27 年)では「個性豊かな観光名所を活かした都市との交流の活発化」が村づくりにおける重点プロジェクトの 1 つとされており、天河社やその歴史にまつわるシンポジウムが天川村主催により東京で開催される等の動きが見られる。

注 18) 文献 18 の 95 頁参照。

注 19) 文献 18 の 74 頁表 2 の数値をもとに筆者作成。

注 20) 文献 18 の 78 頁より。

注 21) 元来は辨財天を本尊としていたが、廃仏毀釈により改められた。周囲に配されていた多くの寺堂もこの折に失われたとされる。

注 22) 講の規約は神楽講入講案内書より。また、講員構成の実態は調査 iv 内 福宜への聞き取りより。

注 23) 関連して、以下のような聞き取り結果が得られた。「自分たち、氏子さんらの子供たちも町で住んで、家を構えて生活しているのは現状なので、その人たちに帰って来てもらうというわけにはいかないから、違った感覚、違った意味で、どういう形で神社に密接にご奉仕をいただけるのか、とか、天川の魅力をもっと知っていただくというか。先祖が敬って来た氏神様をどのように守っていくかという、まずはその人たちの意識を変えていかないといけないだろうし、それと同時に新しい人を迎え入れて、教化をしていく。そういった時代に来ているのかなと思う。」(調査 iv 内福宜への聞き取りより)

注 24) 「常にみんなが気持ちよくお参りしていただくためには、落ち葉一つ落ちていない状態で清浄に保っておけと。それが根本。官司の心。それが神の心というか。常に清らかな状況で迎えることによって清々しい思いを感じていただく。」(調査 iv 内福宜への聞き取り内容)

注 25) 講社通信第 8 号 57 頁参照。

注 26) 調査 iv 内福宜への聞き取り内容「供養塔というものを昭和 55 年に建てて、それから一気に人の流れは変わって来た。ご神縁というか、魂が働いてくるのか。南朝の先祖を持つ人たちがが一つと、何か分からないがお参りしてくる。縁があつて」より。

注 27) 調査 iv 内福宜への聞き取り内容「やはり昭和 56 年の日輪大辨財天という辨天様がご開帳された時からば一んと、警戸が開いたというか、天川が表に出る様になって来て。そして崇敬者がお参りしてくれる様になった」より。

注 28) 朝日新聞平成 4 年 2 月 4 日朝刊より。

注 29) その後の報道によれば「負債を積み残したまま分割で返済しており、実際には競売されていない」(毎日新聞平成 8 年 1 月 10 日大阪版夕刊より)。

注 30) 文献 19 の 92 頁より。「天河曼陀羅」の一連の活動は「天河を大切に思いつつ天河の地を離れて遠心的に活動してゆくことで、天河社への支援とメッセージを送るという方法」(講社通信第 2 号 5 頁の天河曼陀羅実行委員会事務局担当者による一文より引用) であったとされる。

注 31) 文献 20 の 10 頁より。

注 32) 「天河大辨財天社崇敬会」は「太々神楽講」に「移行」という形がとられた。(神楽講規約より)

注 33) この話し合いの場にいた、のちのボランティアスタッフによれば、個々に参拝に訪れたり、図 5 内昭和 57 年からの「音楽家による奉納演奏 開始」のように、「それまで、天河に魅かれ、好んで訪れられる方はたくさんおられたようでしたが、それぞれの方がそれぞれの形で、独自に天河と結ばれておられたようでした。個を大切にすることは確かに大事ではありますが、横にも手をさしのべ、繋いでいける心の広さ、暖かさが必要な時代を本当に迎えていると感じました。」(講社通信第 5 号 13 頁より引用) また、「私たちが何十億のお金はとても出せない、すぐには。だけど、全然天川を知らない人に、ここを知っていただくことが大事だと思ったわけ。天川を知っていただいて。すごくいい場なので。気持ちのいい場なので。だからとにかく来ていただいて、泊まってもらって、ここのエネルギーを細胞に入れてもらって、本当にここがいいところだと思っていただける、そういう人たちを増やしていくこと。そうすればその方たちでできることをしてくださるんじゃないですか、ということ。浄財でするのかもしれないし、何か働きをしてくださるのかもしれないけれど。ご奉仕的なことを、したいと内側から思ってくる、それが大事だね、という話をして。じゃあ私たちができることで、みなさんにここに来てもらおうということで、ワーク

ショップが始まった。」(調査 iv 内ボランティアスタッフへの聞き取りより)

注 34) 神楽講入講案内書参照。その他、太々神楽は「古代より連綿と続いている天河社の神事であり」、「己と神が一つになることであり、この体験を通して、“新しい人間”への変容の第一歩としてほしい」とされる(講社通信第 1 号 1 頁より引用)。

注 35) 活動内容に関して、「何でもいいというわけじゃなくて、神様の方向に向かってることにしよう。それと、営利目的はやめよう。」「みんなが集まって何かするということを通して、自分自身も磨かれていくという。」(調査 iv 内ボランティアスタッフへの聞き取りより)

注 36) 講社通信第 5 号以降、毎号巻末掲載の《「天河太々神楽講」とは》より引用。

注 37) 講社通信第 1 号～第 14 号掲載の「講員名簿」欄をもとに筆者作成。期間区分は、講活動開始前までと、開始後の平成 27 年までをおよそ 4 等分するように設定した。入講者は欧米地域にもみられるが僅少のため、図での表現は省略している。

注 38) ちなみに新入講者の入講の動機について、講社通信における言及箇所の抽出を試みたが、「大祭の日が自らの誕生日と重なっていたため」の 1 件のみが得られた。

注 39) 講社通信第 5 号 13 頁より。

注 40) 「この場でやるのだから、神様ときちんと結んでいただくご祈禱はしていただきましょうということで。普通は五千円からなんですけど、太々神楽講としてやらせていただくということで、そこは 1 万円からにしてもらいましょうということで。」(調査 iv 内ボランティアスタッフへの聞き取りより)

注 41) 動機は複合的なものも多く特定が難しい(「ご縁をいただいて」といった曖昧な表現も多くみられた)が、明言されているものに限定し収集を行なった。動機が複数挙げられている場合にはそれぞれ 1 件として集計している。

注 42) 講活動の実施報告は、講社通信第 14 号内「太々神楽講活動報告」欄の平成 27 年 2 月 4 日分までが調査時点で最新のものである。

注 43) 天河社の年間の祭典行事をまとめたものを補表 2 に示す。講社通信の近年の恒例行事実施報告をもとに筆者作成。その他、毎月 1 日と 15 日には月次祭が斎行される。

注 44) ここで言う「境外」には、本殿のある敷地から地理的に遠隔に位置する禊殿の一带も含むものとする。

注 45) 図 11 中の「天川ハープ園」では M.Y. により遊休地を活用した花卉栽培等が行われており、収穫物は天河社に奉納されたり、講活動に利用されている。

注 46) 「自然の中で体を動かして、汗をかいて、自然と里人たち、氏子さんたちとの調和というか、コミュニケーションを取ろうという形で、ずっとやってくれている方々がいる。それは非常に助かっている。村の人たちもありがたいと。そこでいつも準備の前などに、村の人たちがお昼だったらカレーライスを作って一緒にそこで食べてもらってお話ししたりする。」(調査 iv 内福宜への聞き取りより)

注 47) 文献 23 の 356 ～ 361 頁「こう(講)」の項を参照。

注 48) 「もともと財団は、宗教活動としてできない部分、文化活動となるべくしようということで作られた。それも平成の社殿再建に伴う借財の影響で活動が制限されて以来、それほどたくさんは活動できていない。」(調査 iv 内ボランティアスタッフへの聞き取りより)

Additional table2 events of Tenkawa Shrine 補表 2 天河社の年間祭典行事	Annual festival 天河社の年間祭典行事
一月一日 1 January	歳旦祭 New Year's festival
一月五日 5 January	松囃神事 (湯立神楽・三番叢奉納) Matsubayashi festival
一月十五日 15 January	とんど祭 (於 神社護摩壇) Tondo-matsuri festival
一月十七日 17 January	牛王宝印神符頒布祭 Festival for distributing sealed talismans
二月二日 2 February	鬼の宿 (神迎え神事・杜家宅) Oni no yado(greeting the God)
二月三日 3 February	節分祭 (所願成就厄除け採燈護摩祓修) Setsubun festival
旧三月三日 3 Mar. (lunar calendar) hereafter "1.c."	桃の節句祭 Spring grand festival 春の太々神楽講講社大祭 Spring grand festival of kosha
四月十四日 14 April	春季大祭 [慈航祭] (能楽奉納) Spring grand festival
五月中旬 Mid May	赤山神社 [奥宮] 大祭 (一泊二日) Grand festival of Akasaka Shrine(the rear shrine)
五月下旬 Late May	おんだ祭 (お田植え神事) Onda-matsuri festival
旧五月五日 5 May (l.c.)	端午の節句祭 Iris festival
六月三十日 30 June	夏越大祓式 Summer purification rites
七月十六日 16 July	宵宮祭 Yoi miya festival
七月十七日 17 July	例大祭 (採燈護摩祓修・能楽奉納) Annual grand festival
旧七月七日 7 July (l.c.)	七夕祭・萬霊供養祭 Tanabata festival, Retreating spirits festival
旧七月八日 8 July (l.c.)	七夕護摩供 (供養護摩木等を焚き上げ) Tanabata Goma-kyo
九月一日 1 September	八朔祭 Hassaku festival
旧八月十五日 15 August (l.c.)	観月祭 (仲秋の月神事) Full moon festival
九月下旬～十月上旬 Late Sep. ~ Early Oct.	採穂祭 (稲刈り神事) Rice-harvesting festival
旧九月九日 9 Sep. (l.c.)	重陽の節句祭 Chrysanthemum festival
十一月二日 2 November	秋季大祭 [亥の子祭り] (能楽奉納) Autumn grand festival
旧十月十日 10 Oct. (l.c.)	五節句開きの神事 (とうとたり) End of five seasonal festivals 秋の太々神楽講講社大祭 Autumn grand festival of kosha
十一月二十三日 23 November	新嘗祭 Harvest festival
十二月二十三日 23 December	天長祭 [天皇誕生日] Tencho-sai festival [Emperor's Birthday]
十二月三十一日 31 December	年越大祓式 Year-end purification rites 除夜祭 Joya-sai

※ [] : 筆者付記 Additional note

- 注 49)「最初は講として認識されていなかったが、いつからか昼ご飯を勧められるようになった。神社にとっても村にとっても、自作務衣を着て村の手伝いをしてくれたことは大きかったのだと思う。」(調査iv内講元への聞き取りより)
- 注 50)「二〇〇九年の夏に、その窯をつくる作業をして、二〇〇九年一月月二二日初窯式を行った。天川村の村長さんや教育長さんもみな集まって。天河で護摩壇野焼き講を一四年にわたってやってきたことが蓄積と土台になって、一一月の初窯式につながった。」(文献 19 の 71 頁より引用) またこの窯の意義として、「単に陶芸作品を焼く窯ではなく、神社と村の人々とそこに訪れた人を結び、日本の文化を開く場となっていくだろう。」(文献 19 の 174 頁より引用) と述べられている。
- 注 51)「神社も財政的にも厳しかったし、修復していくためには何千万というお金が必要になって来た時に、申し訳ないけれどもうちの崇敬者の方に、支援金の要望を出させてもらって。今はネットの社会なので、T 監督(講元)のネットワークの部分とか、いろんなみなさんから寄付金、義援金をお送りいただいて。そのお金で、全部修復ができたということ。ありがたかった。そうやってお金で力添えしてくれた方もいるし、自分の身で奉仕してくれた方もいる。」(調査iv内祠宜への聞き取りより)「2011 年の被災後には、泥かきをしに行く人もいれば、お金を出す人、それと呼びかける人がいた。自分はメールマガジンの読者が 2,000 人いることもあり、義援金の声かけを行なった。」(調査iv内講元への聞き取りより)
- 注 52)「他の講元も神社への募金の呼びかけは行なっていたので、神社にはお金が集まっていたが、村の方には集まっていなかった。被害の後、天川を訪れた際も官司さんに村内を案内していただき、神社ではなく村が支援を必要としていることを感じた。顔のわかる村人に直接お金を渡して回った。」(調査iv内講元への聞き取りより)
- 注 53) こうした講の性質は、文献 8 の 284 ～ 314 頁、天田顕徳著「講の社会的位置づけの変遷、および講研究の射程に関する一考察」において紹介されている筑波山的神窟講にも類するところがあり、「つながりや(宗教)文化を体験する／させる文化装置」としての側面を持っている」ことや、「これまでとは違った仕方ではびとの受け皿となることで、現場において宗教そのものへの関心や宗教的な感覚が醸成されるという可能性が現在、高まっているのではないかと」と指摘されている。

参考文献

- Yoji Inaba: Introduction to social capital -From isolation to bonds, Chuokoron-shinsha, 2011. 11
稲葉陽二：ソーシャルキャピタル入門－孤立から絆へ，中央公論新社，2011. 11
- Yoshito Yamazaki and Yasutomi Sakuma: Making a village where we live and inherit -A region that survives by exchanging, relocating, and going through, Gakugei-shuppansha, 2017. 8
山崎義人，佐久間康富 編著：住み継がれる集落をつくる－交流・移住・通いで生き抜く地域，学芸出版社，2017. 8
- Eiichi Otani and Yoriko Fujimoto: Series Religion and social capital 2 -Religion to create a community, Akashi-shoten, 2012. 12
大谷栄一，藤本頼生 編著：叢書 宗教とソーシャル・キャピタル 2 地域社会をつくる宗教，明石書店，2012. 12
- Kenji Ishii: Shrine Shinto and marginal village, Journal of Shinto studies, no. 237, pp. 1-24, 2015. 1
石井研士：神社神道と限界集落化，神道宗教，no. 237, pp. 1-24, 2015. 1
- Ryota Negishi, Haruhiko Goto and Taro Taguchi: A Research of the influences festival has affected regional management -A case of Chichibu night festival, which takes place in Chichibu, Saitama prefecture, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AI J), vol. 72, no. 622, pp. 129-136, 2007. 12
根岸亮太，後藤春彦，田口太郎：祭事が地域運営に与える影響に関する研究－埼玉県秩父市における秩父夜祭を対象として，日本建築学会計画系論文集，vol. 72, no. 622, pp. 129-136, 2007. 12
- Yoshimasa Ikegami et al.: Iwanami Lecture Religion vol.6 -Kizuna-Reconsidering the cooperativeness, Iwanami-shoten, 2004. 6
池上良正 他 編：岩波講座 宗教 第 6 巻－絆－共同性を問直す，岩波書店，2004. 6
- Mayumi Sekizawa: "Soto-ujiko" and "Uchi-ujiko" -The organization of shrine parishioners and the religious service of Katte-jinja Shrine in Kuroda, Nabari City, Mie Prefecture, Bulletin of the Folklore

- Society of Japan, vol. 194, pp. 125-148, 1993. 5
関沢まゆみ：「外氏子」と「内氏子」－三重県名張市黒田・勝手神社の氏子組織と祭祀，日本民俗学，vol. 194, pp. 125-148, 1993. 5
- Hachiro Hasebe: Possibility of 'Ko' research 2, Keiyusha, 2014. 10
長谷部八朗 編著：「講」研究の可能性 2，慶友社，2014. 10
 - Yorio Fujimoto: History of the system of religious associations of shrines in modern times and Inariko, Ake, no. 58, pp. 107-126, 2015. 2
藤本頼生：近代における神社講社制度の沿革と稲荷講，朱，no. 58, pp. 107-126, 2015. 2
 - The Institute for Japanese Culture and Classics, Kokugakuin University: Shinto dictionary, Kobundo, 1994. 7
国学院大学日本文化研究所 編：神道事典，弘文堂，1994. 7
 - Hachiro Hasebe: Possibility of 'Ko' research, Keiyusha, 2013. 5
長谷部八朗 編著：「講」研究の可能性，慶友社，2013. 5
 - Hachiro Hasebe: Possibility of 'Ko' research 3, Keiyusha, 2016. 10
長谷部八朗 編著：「講」研究の可能性 3，慶友社，2016. 10
 - Chiomi Watanabe, Shoko Nakagiri and Juichi Yamazaki: Consideration of the process of development of regions based on Tomatsu shrine in Amagasaki-city -The case of Tomatsu Issun-Mame festival, Journal of Rural Planning Association, vol. 31, pp. 255-260, 2012. 11
渡邊千央実，中桐祥子，山崎寿一：尼崎市・富松神社を核とした地域づくりの展開に関する一考察－富松一寸豆祭を中心として，農村計画学会誌，vol. 31, pp. 255-260, 2012. 11
 - Yorio Fujimoto: Child care support and use of shrine precinct -possibility of shrine for Shinto welfare, Bulletin of Research Center for Traditional Culture, Kokugakuin University, no. 1, pp. 113-128, 2009. 3
藤本頼生：子育て支援と境内地の活用－神道的福祉実現の場としての神社の可能性，國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要，no. 1, pp. 113-128, 2009. 3
 - Yorio Fujimoto: Modern history of Shinto and social project, Kobundo, 2009. 12
藤本頼生：神道と社会事業の近代史，弘文堂，2009. 12
 - Masanari Itai: Study of the workshop program which can be used at a shrine, Journal of Shinto studies, no. 240, pp. 132-134, 2015. 10
板井正斉：神社の文化性を活用した体験的学習（ワークショップ）による教化プログラムの開発に関する一考察，神道宗教，no. 240, pp. 132-134, 2015. 10
 - Masanari Itai: A Study of Collaboration between Shrines of Depopulated Areas and "Community-Revitalization Groups", Focusing on the Workshop "Inori no Mori (Forest of Prayer)", Journal of Shinto studies, no. 244, pp. 132-135, 2016. 10
板井正斉：過疎地域の神社と、地域おこし協力隊の連携に関する一考察－ワークショップ「いのりのもり」の事例，神道宗教，no. 244, pp. 132-135, 2016. 10
 - Senichi Tanaka: Revisiting Tenkawa Village, Yoshino-gun, Nara Prefecture (Interim report), Bulletin of Institute of Folklore Studies, no. 40, pp. 67-95, 2016. 3
田中宣一：奈良県吉野郡天川村再訪（中間報告），民俗学研究所紀要，no. 40, pp. 67-95, 2016. 3
 - Toji Kamata and Takahiro Kondo: Kami -Challenge for a new death-and-life studies, Koyo-shobo, 2010. 10
鎌田東二，近藤高弘：火・水－新しい死生学への挑戦，晃洋書房，2010. 10
 - Toji Kamata and Takashi Tsumura: Tenkawa Mandara -Channel to super religion, Shunju-sha, 1994. 7
鎌田東二，津村喬：天河曼陀羅－超宗教への水路，春秋社，1994. 7
 - Toji Kamata: Field work in the world of the god -generation of spiritualism and folklore, Seikyusha, 1987. 12
鎌田東二：神界のフィールドワーク－霊学と民俗学の生成，青弓社，1987. 12
 - Toji Kamata: Journey to the Holy Land -The beginning of Psychic Geography, Seikyusha, 1999. 12
鎌田東二：聖地への旅－精神地理学事始，青弓社，1999. 12
 - Japanese Ethnology Association: Japanese social folk dictionary, vol. 1, Seibundo-shinkosha, 1952
日本民族学協会 編：日本社会民俗辞典，vol. 1, 誠文堂新光社，1952

DEVELOPMENT OF ACTIVITIES BY NONRESIDENTS THROUGH “KO”

– Case of Tenkawa Daibenzaiten-sha Shrine in Tenkawa-village, Yoshino-gun, Nara-prefecture –

Ryoya MORITA^{*1}, *Haruhiko GOTO*^{*2} and *Yoshito YAMAZAKI*^{*3}

^{*1} Research Assoc., Faculty of Science and Engineering, Waseda Univ., M.Arch.

^{*2} Prof., Faculty of Science and Engineering, Waseda Univ., Dr.Eng.

^{*3} Prof., Dept. of Regional Development Studies, Toyo Univ., Ph.D.

Owing to the falling birthrate and an aging, declining population, it is considered important to sustain regional images, especially in rural areas to maintain the vitality of the region while incorporating external entities.

One cultural resource found all over the country are shrines. Many shrines have long contributed to nurturing and maintaining the ties among local residents through rituals. Although the entities that support the shrine and its rituals are mainly "Shinshoku (priest)" and "Ujiko (parishioner)," in areas of ongoing depopulation, it would be desirable to build a relationship with the "Sukeisha (worshipper)" who contribute to protecting and maintaining the shrine although living outside thereby generating vitality in the region.

This study focuses on Tenkawa Daibenzaiten-sha Shrine in Nara Prefecture, which was revived from devastation and where worshippers not only pray or participate in annual events but have also performed new activities such as “Tenkawa Tatakagurako” (hereinafter referred to as “Kagurako”) for 20 years, to understand the reasons behind the shrine’s prosperity and the actual condition of Kagurako, which is supposed to a primary reasons for its prosperity. Based on this, we examine the creation of human, physical and social capital through the activities of worshippers. The purpose of this research to examine the development of activities by nonresidents through ko in the area.

The direct opportunity for establishing Kagurako was a debt-laden shrine report accompanying the reconstruction of the shrine. The earlier efforts of the shrine, increase in worshippers, enhancement of festivals, establishment of the foundation on which the cultural activities of the shrine are based, led to ko and the development of activities as a compounding factor. The above-mentioned efforts include rebuilding and reigniting the tradition of festivals in cooperation with entertainers outside the area, keeping the shrine premises as a sanctuary always clean, and using the treasures and historical resources at appropriate times.

The Kagurako is not based on the "neighborhood" or the "same belief" traditionally understood as the principle of uniting ko, and is characteristic in offering extraordinary experiences (qigong, yoga, walk, making ceramics and so on) around the shrine in which people can participate casually. The management of ko with these characteristics has led to the increase in activities seen after the Prospering period, and realized in human capital, which supports the festivals, physical capital contributing to regional cultural activities, and social capital bringing external support to the area during a disaster.

As mentioned, to develop the activities of nonresidents in the area an effective technique is to offer extraordinary experiences in which people can participate casually through “ko” while trying to enhance the religious culture based on the history of the shrine. This can also increase the sustainability of the area where the shrine is located, as can be seen from the fact that several households, attracted by the charm of the shrine, have moved into the village in recent years.

(2018年8月10日原稿受理, 2019年3月25日採用決定)